

基調論文

楽しくなければ生活科じゃない

静岡大学助教授 馬居 政幸

一 「生活科」の新しいとは

——先生と子供の夢への挑戦——

生活科の実施が学習指導要領で正式に告示されてから一年。いよいよ四月から全国の小学校で移行措置としての実践が始まります。多分、先生方は期待や不安や心配が入り交じった複雑な気分ではいるのではないのでしょうか。私も昨年の今頃は同じ気持ちでした。四年前から附属浜松小学校の合科指導や統合活動の研究・実践に関わり、先生方の苦勞を見ていたからです。しかし、現在、私の思いは次のように変わりました。

「生活科とは、本来、教師なら誰もがやりたいと思っている教育。不安に思うことはなにもない。大事なのは、高度な理論や方法の理解ではなく、先生が子供と同じ目の高さで自然に活動」できるかどうか。必要

なのは、授業技術よりも子供や父母や地域の人達と「楽しく」語れる先生の「魅力」。

このように思うようになったのは、昨春秋、県西部地区や清水市の先生方と始めた「生活科を考える会」で論議する先生方の姿でした。生活科論を闘わせながら、実際には「自分の教育の理想や子供への思い」を語っていたからです。また、同じ頃に参加する機会があった御殿場朝日小、静岡南部小、浜松曳馬小などの公立小学校の研究授業で、先生方と子供達のはち切れそうな「笑顔」に教えられたからです。

生活科について数多くの出版物が出ています。戦後初めて教科が変わり、全国二万以上の小学校の子供達全てに新しい教育が実践される以上当然でしょう。その意味で生活科の理論や方法を書物で学ぶことは重要です。しかし、それは生活科という素晴らしい教育論

特集

生活科の試み

●基調論文

●座談会

●実践記録



(焼き芋の跡片づけをする福田小の子どもたち)

や方法が提示され、それを実践することにより問題が解決するといったものではないと考えます。

私は生活科の新しさは次の二点だと思っています。

①教師個々が目の前の子供一人一人の育つ過程をトータルに見つめ直すことにより「自分の教育」のあり方を改めて「問い直す機会」を得たこと。

②そして、新たな「学びと教えと育ちの過程」を、教師と子供達が、家族や地域の人達と共に「創造すること」に挑戦できること。

いずれも教師なら誰もが抱いている理想ではないでしょうか。同時に、なかなかできないことでもあると思います。「問い直す機会」「創造すること」に挑戦とした理由です。

生活科のスタートは、眉間にしわをよせて参考書と格闘することではありません。相撲や縄跳びを、恥ずかしがらずに夢中になってやれるかどうかを「自分に問う」ことから始まると考えます。

表題を「楽しくなければ生活科じゃない」とした理由です。もっともこのフレイズのヒントは静岡市南部小の講演での中野重人先生の結びの言葉「楽しくなければ学校じゃない」であることも付記しておきます。

「社会や自然といわれる世界」の変化です。その世界の学習を目的とする社会科と理科が生活という名の教科に変わることもまた象徴的であると考えます。

なぜ低学年の理科と社会科をなくすのか、と生活科に批判的な方もいると思います。特に、社会科や理科の研究と実践に情熱を燃やしてきた先生方にとって残念な思いもあると思います。しかし、その先生方も、子供が育つ過程の現況をこのままにしてよいと思う人はいないのではないのでしょうか。私は社会科教育の研究者として学校教育の現状を学んできました。また、県内の生涯学習推進事業に携わりながら、地域での教育の現状も学んできました。その立場から、地域の人や物や自然の変化は、学校の教科として社会科と理科を区分する基準の変更にまで及ぶと考えます。

さらに、教科とは、一定の子供像や学問・科学観に基づき考案された教育方法の一つです。ところが、今日の問題は、前提となる子供像や学問・科学観自体がゆらいでいるにあるといえます。

問題は変えるかどうかではなくどのように変えるかであると思います。あるいは、どのように創造するかといった方がより正確かもしれません。なぜなら、現在の子供達が生きる場に生じている変化を経験したも

二 なぜ「生活科」が必要なのか

——子供の育つ場の変化——

右に述べたことについて、なぜ今更こんな当たり前のことを……との感想を持つ人もいるでしょう。しかし、その当たり前と思っていた部分での変化が生活科を必要としたのです。

教育には不易と流行があるといわれます。先の①②はともに教育論としては不易でしょう。しかし、問題はそれを今日の学校でいかに実践するかです。

現在の学校制度ができて四十数年。その間に日本も世界も未曾有の変化を被りました。その結果、人が生きる場も変わりました。家族の形態や機能、地域の間関係、遊びの世界、情報環境など子供の育つ場は、新学制が施行された昭和二十年代と全く異なるものになりました。貧しさの克服を動機とする勤勉への意欲やしつけの方法は、豊かさが日常化した世界では根拠を失います。家業の手伝いで、満足に小学校すら通えない子供が少なくなかった時代に定められた教科構造が、ほぼ全ての子供が二、三年の就学前教育を受ける時代に変わるのはむしろ当然と考えます。

そして育つ場の変化とは、子供の生活を構成する

のは誰もいないからです。当然、その中で行うべき教育の手法もどこにもありません。とすれば答えは子供達の生活自体の中に、そして子供達と先生の間に創造するしかないと考えます。

三 「生活科」を進めるために

(一) 先ず、子供の生活に学ぶ行動を

——生活科マップは先生の学んだ記録——

生活科の生活とはいってもなく子供の生活です。ところがここに問題が生じます。子供達の生活を知らない先生が多いと思うからです。ほとんどの先生が学区外からの車通勤のため、子供達と生活の場を共有している方は少ないはずだからです。確かに、学校の中での子供達の行動については、教師は誰よりも知っています。しかし、低学年の子供達にとって、生活の場の中心は学校の中よりも家庭とその周辺です。

子供達はどこで、誰と、どんな遊びをしているか。どの店なら一人で買物ができ、家の人となら行ける店はどこか。危ない場所は。雑草がはえ、虫がおり、鳥がくる場は。子供だけで利用できる施設や設備は。それぞれ天候や季節の変化による差は。地域の慣習や年中行事は。それらをよく知っている人は誰……。

生活科を進める第一歩は、教師がこのような子供の生活場面一つ一つを学び取ることへの挑戦です。そのためには、先ず、車から出て子供と同じ目の高さで子供の生活の場を歩き回ること。次に、その過程で気付いたことを徹底して記録すること。その際重要なのは空間上の位置や色や形や大きさを絵で記録すること。その結果として、子供の活動と学習のための地図、すなわち生活科マップが自ずとできるはずでです。

いいかえれば、生活科マップとは、先に教える内容があつて、その所在を学区の中に見つけて記録したものではありません。生活科は自分との関わりを最も重視する学習です。その意味で、子供一人一人の活動と学習課題を、その子供の生活の場に即して見出す過程がマップ作成の過程であると考えます。

(二) 子供の生活の場が生活科の教室

——授業・活動構成は動的で立体的に——

このように子供の日常生活に根ざした活動を中心とする教科が生活科です。その意味で、指導書にも明記されているように、活動は特定の内容を教える方法や手段ではありません。活動自体が内容であり、方法であり、目標です。学習指導要領に提示された各学年の

さらに、教師は従来の授業観をすてる必要があります。導入・展開・結論という時間の流れに、教師と生徒の言葉のやりとりがクロスする授業案では、生活科の活動は表現できません。子供達の活動内容や動く範囲、その変化に応じた教師である自分の関わり方、それらが一体となった場面が次々と転換していく。このような動的で立体的な授業の構想力が要求されるはずです。一種のイメージトレーニングのようなものが生活科には必要になってくると思います。

そして、これらの活動を本当に子供達の生活に活かすためには、いうまでもなく家庭や地域との連携が不可欠です。それも、単に学級通信等による一方通行的な情報提供のみでなく、家族や地域の人達が先生として参加できる活動を創造することが課題です。

生活科の教師は教える師というより、様々な人を子供達の前につれてこられるコーディネーターです。

四 先生の生活が問われる生活科を

——背中
で勝負が
できる人
に——

生活科では教師は子供達の活動を見守る助言者であると言われます。そのこと自体は否定しませんが、私は別の観点から考えたいと思います。

内容は、子供の実体に即して考案された活動を進める際のチェックポイントのようなものと考えます。

例えば、公園での活動。社会科の場合は砂場やベンチの使い方を教えるために公園の施設を用います。理科は秋の自然を学ぶために公園のイチヨウの木を用います。生活科はその公園が子供達の遊び場だから用いるのです。その遊びの過程で、いかに自分達を育む自然に気付き、みんなが安全に遊べるように様々な道具を使うルールを身に付けるか、が課題です。

生活科をしつけ科と批判する人もいます。その危惧を理解できないわけではありませんが、私は、本当に現在の一、二年生の子供達と授業で格闘している人なら、しつけ科なんて教科が可能であるとは思わないと考えます。子供達のエネルギーはそんな大人の思惑で押さえこまれるほど弱い物ではありません。

むしろ、子供達の活動に耐えられる教室、廊下、中庭、運動場などの整備や工夫が必要です。学校の外での活動を進めるには、子供の安全に気を配り活動の場を提供してくれる地域の人をいかに育てるか。生活科の活動は、危険だから止めるのではなく、この活動に必要な条件整備は何か、という観点から進めなければ豊かな結果を得ることはできないと考えます。

子供に人間として生きるための最も基本的なことを教えるのが両親の役割です。そして、その教え方は学校と異なり、自分の生きる姿自体により気付けさせる場合が多いと思います。背中で教えるということです。私は生活科の教師もまた同じだと考えます。

附屬浜松小学校で生き物と遊ぶという活動に参加した時でした。一年生の女の子が「かたつむりがなめくじになっちゃった」とカラが壊れてむき出しになって死にかけているかたつむりを鉛筆でつついている場面に出会いました。私は一瞬どう判断すればよいのかわからなくなりました。しかし、それを見た担任の先生は、静かに女の子とかたつむりをじっとみつめて、一言、小さな声でいいました。「かたつむりさん死んじゃうよ……かわいそう……」。その瞬間、女の子の目に涙がにじんできました。

思わずでた先生の一言が、一年生の女の子の心に小さな生き物の命の重さを感じさせたのだと思います。そしてその言葉は、その先生の生活に根ざした言葉であつたからこそ子どもの心に響いたのだと思います。

生活科の生活とはあくまで子供の生活です。しかし、その活動の中で問われるのは子供ではなく教師自身の生活ではないでしょうか。

随想 提言シリーズ⑩	元・静岡県高等学校長協会会長	渡邊 悦郎	4
老書生の放言	元・静岡県立静岡高等学校校長		

基調論文

楽しくなければ生活科じゃない

座談会 生活科をどう進めるか

静岡大学助教授 馬居 政幸

12 7

司 会 静岡市立長田東小学校校長

望月不二夫

出席者 裾野市立深良小学校校長

服部 孝夫

沼津市立開北小学校教諭

藤田 文夫

静岡市立南部小学校教諭

米津 七生

磐田市立磐田北小学校教諭

池田 和世

浜松市立曳馬小学校教諭

高山 佳己

実践記録

一年生・生活科を志向した実践——秋の岩本山で人形祭りをしよう

富士市立岩松小学校教諭

佐野 政子・森 好美・小林 眞弓

23

生活科の授業を志向した私の試み

大東町立大坂小学校教諭

鈴木 隆広

28

生活科的試み——「秋とあそぼう」の実践

福田町立福田小学校教諭

古山 慶子

33

アンケート——〇〇人の考え方

先生にしかられた思い出

県内小・中・高校教諭

38



特集・生活科の試み

昭和63年度「静岡県教育研究奨励賞」入賞作

新教科・生活科へのアプローチ

静岡市立南部小学校教諭

山下 由修

42

全身で学ぶ喜びを味わう合科的学習

湖西市立鷺津小学校教諭

松本 孝夫

48

社会事象を主体的にとらえ、自分の生活と結びつけて考えていく社会科の授業

修善寺町立修善寺中学校教諭

小川 隆

54

「第十九回静岡県教職員芸術祭」文芸部門入賞作品 随想・評論

火祭

静岡県立清水西高等学校教諭

窪田 純子

60

終末処理場

静岡県立掛川東高等学校教諭

鴻野 元希

65

羅漢句人の死

(退職互助部) 静岡

川田 七郎

68

つれづれなる山

浜松市立篠原小学校教諭

大谷 一雄

73

随想・評論選評 気らくに書く

静岡県出版文化会編集長

太田 昭

77

◆ 新刊紹介・静岡県教職員組合立教育研究所編「教育研究所十年の歩み」

静岡県教職員互助組合専務理事 伊藤 守康

79

◆ 表紙絵によって

サーカスがやってくる

静岡県立藤枝北養護学校教諭

石川志津子

78

◆ 現代教育事情

① 学業成績

61

② 「校則・きまり」について

63

◎ わたしたちの作品 「友情の樹」ほか 浜北市立浜名小学校

カット とびら

村上 泰男 浜北市立内野小学校校長

もくじ 中村 秀夫 沼津市立静岡浦中学校教諭

